

第19回 日能研

文学コンクール

優秀賞

【奨励賞】真の「平和」を求めて

学習院女子高等科・二年

中野 美優さん

作品に対する思い・感想

世界では様々なことが良くも悪くも目紛しく変化しています。そのため私たちが三十歳になった時の世界など想像もつきません。しかし、それゆえ私たち一人一人には今、「八十億分の一」としての責任と自覚が求められているのではないのでしょうか。私自身も、真の「平和」に向けて、日々自覚を持って行動していきたいと思っております。

最後に、このような形で賞をいただけたことを大変嬉しく思っております。有難う御座いました。

真の「平和」を求めて

中野 美優

30歳の私はどんな人になっているのだろうか。どんな職についてどんな家族を持ってなど色々なことに想像を膨らませることができる。様々なことを思い受かべていると、ふと世界は平和な状態になっているのだろうかと感じた。私が「平和」と聞くと思い浮かべるのは戦争に対する「平和」である。戦争をしていない状態、例えば今の日本は「平和」で、反対に戦争をしている状態、例えばロシアとの戦闘が続くウクライナは「非平和」だと自分の中で勝手に捉えている。しかし先日、この考え方に違和感を感じる出来事があった。テレビの報道番組を見ていると、昼間なのに人影がなく、町中にサイレンが鳴り響いている様子が映されたのだ。これは台湾の映像で、中国からの軍事侵攻に備えて防空訓練を行なっている様子であった。調べてみると、この防空訓練は毎年恒例であるものの、今年は内容を強化したものであったらしい。私にとって最も印象的だったのは、この訓練の後、親たちが、幼い子供たちを有料のワークショップに参加させていたことである。子供たちはワークショップで、負傷者への手当の仕方やミサイルが飛んできた時にどう隠れるのかなど様々なことを学んでいたのだ。このニュースを見た時、今までの自分の考えに間違いがあるように感じた。それは、台湾では中国から軍事侵攻されておらず、戦争はしていない。しかし国内の緊張感が非常に高まっている様子が感じられたからだ。戦争をしていないなら一概に「平和」と安易に言える訳ではなく、「平和」と「非平和」の二つの概念の間にグラデーションがあるように感じた。

さて、この考え方を日本に当てはめてみると日本は完全な「平和」であると言えるのだろうか。対米関係や対中関係というように政治の面で少なからず緊張や課題があって「平和」であると明言できないことは確かである。しかし、この「平和」「非平和」のグラデーションは国と国との政治や戦争に対してだけ当てはまることなのだろうか。

一度、戦争以外のことに目を向けてみる。OECD（経済協力開発機構）が、「世帯の所

得がその国の等価可処分所得（手取り収入を世帯人数の平方根で割って調整した額）の中央値の半分に満たない人々の割合」と定義している「相対的貧困」という指数がある。厚生労働省の「国民生活基礎調査」によると、2018年の相対的貧困率は15.4%。つまり、日本人口の6人に1人は、相対的貧困ということになり、日本にも経済格差が存在することが目に見えて分かるのだ。社会の15%の人は十分な生活をできなかったり、十分な教育を受けられなかったりすることもあるのだ。こうした現状を抱える日本の社会は「平和」と言えないのではないだろうか。また現状では、SNSで特定の人に対して、集中的に批判や悪口などのコメントが押し寄せ、傷つけられるようなことが起きている。決して日本の社会は「平和」であるとは言えないのではないだろうか。

このように、「平和」と「非平和」の間にはグラデーションがあって、今の状況を示すには、戦争だけではなくて貧困や経済の状況、人同士の関わり方など様々な要因が絡むのではないかと私は考える。

そして、さらに調べてみると、この考え方に類似したもので、ノルウェーのヨハン・ガルトゥングによる「平和学」という考え方があることがわかった。大阪府の資料によると、ガルトゥングは「平和＝戦争のない状態」と捉える「消極的平和」という概念や、社会に存在する不平等な力関係、貧困、格差、植民地主義、差別など（すなわち構造的暴力）のない「積極的平和」という概念を提起した。この考え方を世界に当てはめてみると「消極的平和」が実現されている国はあるにしても「積極的平和」の実現は非常に難しい問題だと思った。例えば先進国であるドイツは、戦争も起こっておらず安全で安定したイメージを持つが、深刻な貧困問題が存在し「積極的平和」は実現されていないだろう。世界一の超大国であるアメリカでは人種差別や経済格差が存在する以前にアメリカ自身が様々な戦争に深く関わりを持ち、「消極的平和」すら実現しているのか曖昧なのが現状である。また、アフリカの国々に目を向けて見ても

貧困や格差、人権問題や食糧難、劣悪な衛生状態、内戦や紛争など多くの課題を抱えており、「積極的平和」からも「消極的平和」からも程遠いものとなっていることは明らかだ。

このように完全な「平和」からは程遠いのが日本及び世界の現状である。果たして私が30歳になった時の世の中は「平和」なのだろうか。明日のことすら何が起こるかわからない私たちが、十年以上先のことなど分かりやしない。でも、30歳までの約13年間に何の行動もせずに過ごすのは決して良くない。私を含めて中学生や高校生が今から未来に対する責任と自覚を持って行動することが、未来をいい方向に変えることに繋がるのだ。私たちにできることを今のうちから一人一人が考える必要がある。

まず一番大切なのは、戦争のない「消極的平和」の状況を継続することだと思う。そのためには私たち自身が積極的に戦争の歴史を理解することが重要である。私は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックに伴う修学旅行の中止で、原爆ドームやその資料館を訪れることができなかった。そのこともあって、先日家族旅行で広島を訪れた際に、原爆ドームを訪れた。しかし、資料館は約2時間待ちと長蛇の列ができており、入館するのは断念することになってしまった。しかし、何と驚くことに、その行列のほとんどは外国人観光客であったのだ。被爆者や戦争経験者の高齢化が進み、戦争の体験を伝えることが難しくなっている今、こうして多くの外国人が原爆の歴史や被害を知ろうと積極的な姿勢でいることに私は強く心打たれた。それと共に、日本国民である私自身も彼らのような姿勢で学ばないと、未来に戦争の歴史を伝えることができなと感じた。私たちは学校で習う以外にも、新聞の特集記事を読んだり、動画共有アプリで検索してみたりと戦争について知る方法はいくらでもある。様々なメディアがあるからこそ、色々な角度から学ぶことが大切だと思った。

二つ目に、日頃から政治に関心を持つことだ。日頃から、政党がどんな政策を掲げているのか、政府がどのように税金を使っているのかなどを知り興味を持っておこな

いと、成人した後も政治に対する意識は低いままになってしまう。2018年の内閣府の調査によると日本の若者は諸外国の若者に比べて政治に関する関心度が最も低く約44%と半分にも満たしていない。私たちが30歳になった時に「積極的平和」が実現しているためにも、中高生のうちから政治に興味を持ち、国民としての責任を持つ必要がある。そして社会全体として構造的暴力の解消に努められるような体制になっていなければならない。差別や格差を他人事に捉えるのではなくみんなで責任を持って取り組める社会の実現が不可欠ではないか。

そして最後に、すべての行動に80億分の1としての自覚を持つことだ。中高生である今も、そして社会人になって影響力が大きくなった時も、世界の80億人の1人であることを忘れてはいけないと思う。人を傷つける言動をしないことや偏見を持たないこと。誰かが住んでいるはずの環境を破壊しないために、エコバッグを使ったり水筒を持ち歩いたりすること。差別や貧困の解消のための会社にインターンとして参加してみる。ボランティア活動をしてみる。色々な国に旅行に行って、世界の現状を自分の目で見てみる。正当な賃金を支払って作られた製品を購入すること。ニュースを見る習慣をつける。自分にできることは何かあるのかを考えてみる。世界を変えるための行動になる。

こうして今のうちから日本国民として、被爆国の国民として、世界の一人として責任と自覚を持つように努めていきたい。そして、自分が30歳になった時に少しでも「平和」に近づいた世界で暮らしていきたい。